百々裏話（69）

おもてあきら

明和改正謡本について何回か書いたまま中断していたこの小稿を再開するが、この数年、正月には翁についての問題を採り上げてきたので、今回もその旧習に従いたい。明和本とも結局は関連するはずである。

「十二月往来について」

翁すなわち式三番には、十二月往来と呼ばれる特殊な形態がある。複数の翁が同時に登場する立合形式で、本来は翁能など他座との立合のための翁であったかと思われ、金春流では翁能のためにこの特殊演出を保有しているが、観世流のみは喜の能にも演じており、私も一度見た記憶がある。

観世流の十二月往来は、翁が二人登場する形で、千歳の舞がすみ、左右に並んだ二人の翁が「あげまきや……れんげりやとんどや」と謡うまでは初日之式と同文であるが、以下

右翁　ややしばし

左翁　そもやそもなでうことにて候ぞ

右翁　かかるめでたきみぎんには、十二月の往来こそめでたう候へ

右翁　それこそもっともめでたう候へ

と前置きの問答があり、続いて、左翁が言い掛け右翁が答える掛け合いの形で次の文句が謡われる。月々の風物を二人の翁のやりとりで数え立てるところから十二月往来と名付けられたのであろう。

睦月の松の風　八絃の琴をしらへたり
如月の霞は　天つ乙女の羽衣よ
弥生の桃の花　三千歳もなほ栄ふる。
卯月の橘は　常世の国も変らじ
皐月のあやめ草　大御殿を葺きたり
水無月の氷は　仙の伝へなりける。
文月の梶の葉は　幸を求むる種とかや
葉月の月はそも　尽きせぬ秋と照らすなり
長月の菊の花　老いせぬ薬なるかも
神無月の竜膽草はうち日さすなへ笑まはし
霜月の梅の花　新嘗祭る心葉
師走のみ雪は　豊年知らす吉き祥

以下「左翁　やあ万歳千歳　右翁　ちとせの千歳
左翁　やあ万歳万歳　右翁　よろづ代の万歳　左翁　みたらはします御調のみ宝　二人かそへてまゐらん翁ども」と独自の文句があって、「あれはなぞの翁ども……」と初日之式と同文句にもどる。舞はもちろん相舞である。

ところで、右に掲出した観世流の往来の現行の文句は、明和改正謡本の一部として別冊で刊行された『九祝舞』（翁の詞章九種）所

——好評発売中——

斎藤太郎著

「初心者問答」

小栗良三氏の質問に答える形式による能謡愛好家の書
文庫判　二〇〇円
二二〇頁　〒五〇円

「私は斯く能を楽しむ」

舞台・作物・小道具・面装束・曲節・囃子などその全てに亘る愛好家の書
文庫判　二〇〇円
一七〇頁　〒六〇円

「能謡随想」

「観能前夜の読物」的性格を強調したユニークな内容の書
B6判　八〇〇円
二〇九頁　〒八〇円

——新刊——

観世流

「謡の手引」

—頭註と傍註・素謡鳥瞰図—
文庫判　一五〇円
八〇頁　〒五〇円

千代田区神田小川町二ノ一
檜書店
電話（二九一）二四八八～九

収の「十二月の往来」とほとんど同文であり、明和の頃から右の形であったことは確かであるが、それが古来の詞章であるとはとても考えられない。「あれはなぞの翁ども…」などという、口語調の翁本来の文句と比較して、擬古文調の右の往来の部分があまりにも異質であることは、一読して明瞭であろう。どうもこれは、観世大夫元章の時代に創られた文句らしい。「紘を」「殿あらか」などの難訓、「うち日さす」「笑まはし」「ゑみ草」(正しくはエヤミ草)などの古代語の採用等に、国学全盛期の作文臭が強いし、そうした傾向は元章の手に成る明和改正謡本の全体に顕著なことなのである。月々の代表的風物を挙げる態度が衒学的である点も元章にふさわしい。神無月に竜胆(りんどう)を、霜月に梅を出しているのは甚だ難解であるが、後者の場合は、元章が新作して明和本の中に加えた「梅」のクセに、梅と新嘗(大嘗)の関係に言及して、

また年の端の大嘗に、したがふ小忌の人達も、昔の髻華(うず)の心ばせ、この花の木を冠の、巾子に添へ方て……

とあるのが注釈の役目を果たしており、右の往来の文句が元章作であることの傍証ともなっている。史料が少ないため文献による立証が困難であるが、現行の観世流の十二月往来の詞章は、明和改正謡本の時に元章によって新作されたものと考えてよいと信ずる。

しかし、観世流の十二月往来が元章の時に始まったわけではなく、室町時代にはすでに存在し、金春流などとほぼ似た文句であったらしい。それを物語る史料が観世宗家所蔵の『五音三曲』と題する室町末期筆の書物で、その中に天文四年の観世次郎大夫宗拈(太鼓方、似我与左衛門国広の父)の奥書のある翁の詞章が含まれており、往来の文句も載っている。管見では室町時代の翁の全体の詞章としては唯一のものであり、観世座系統のものでもあるので、往来の部分のみを全文紹介しておく。(濁点は仮に附した。傍漢字も参照のため仮に附したもの。傍線部は後記参照)

わうらひ(往来)

かかる目出度御きたうには十二月のわうらひこそ目出たう候へ　それこそ尤めでたう候へ正月の松のかぜ　きんのことをしらむ　二月のつばめは　やうなり舞をはやむ　三月の霜(桜)は　四方の山にたな引　四月の郭公　所によき事をつげ渡る　五月あやめ草(の)　玉の御ほうでむ(常若)をふきかざる　六月の扇は　とくわか(に)のかぜを出す　七月の蟬の声　林でうたう也　八月のかりがねは　御放生会みほうしやうへにまひる　九月の菊の花　医王薬方いわうほうやくのみくすりとなる　十月の時雨は　木の葉を染渡る　十一

能・お茶の御写真
観世写真部
前島良彦
前島久男
港区芝白金里町七七
電話白金(441)一八四七五番
一五〇〇九番

化学工業の
総合メーカー
電気化学工業
プラスチック・化学薬品
電炉品・肥料・セメント

月のあられは　不動　慈救偈
ふどうのじくげにことならず
十二月の氷は　ます鏡をろうす
さいしよほつぽう並にほつぽふ　両がんなひ
紫磨金色　八十
すひ　しはこんじき　三十二相　はつじゆつ
種好
しゆごう　十に十　百を百　千を千　万に万の　御つきのたからものそなゑてまいらせんおきなども　あれはなじよのおきなども　そやいとくのをきなども　そよや

末尾の部分など難解であり、誤写もあるらしいが、現行の往来の文句と全く違っていることは明瞭であろう。そして右の形は、江戸初期の金春座の詞章とほぼ一致している。金春の十二月往来としては、般若窟文庫蔵の金春八左衛門安喜（一六六一年歿）筆と見られる一通が管見では最も古いが、それと比較して見ると、一方の明瞭な誤写や小異を除いても左のような相違があり、両者に訛伝の混じていることが知られるものの、月々の景物が同じであることを始め、基本的には一致していると言ってよいであろう。

○安喜本は冒頭に現行観世流と同じ呼び掛けの応答あり。
○やうなり舞ー とうなりいわひ（当成祝）
○御はうてむー御てん。　○はやむー はやめたり。
○とくわかの ー とくわかに。○うたう也ー うたうたり。
○いわうほうやくー にうほうやく
○ふとうのしくけー ふとうのしうげ
○ます鏡をろうすー ますかがみ。○さいしよー 大せう。
○しはこんしきー 今こんじき。○十にー十を。
○万にー万を。○御つきのー みたらわしますみつきの。
○そなゑてー かつひて。

元来が立合の翁であり、薪能の際に四座の大夫が立合で舞うのが十二月往来の本来の形であったことが確実視されるから、観世と金春とで一致しているのが当然なのである。観世流の十二月往来の原形は『五音三曲』所収の本文の如くであったと認めてよいと信ずる。

しかし、江戸初期以後に観世座の薪能参勤が無くなり、事実上は十二月往来の形の翁も退転していたのを、元章が明和新改正の際に復興し、往来の文句やそれに続く部分を、自己の好みに合わせて改変したものと考えられる。そして元章が依拠したのは、『五音三曲』に見られるような観世座古来の詞章ではなくて、金春安喜本が更に崩れた形の明和頃の金春流十二月往来（「三十二相八十種好」の文句などが失われていたらしい）であったかと思われる。詳述している余裕が無いが、往来の前後の部分の詞章からそれが推測できるのである。元章の改正には、似たような性質のものが典拠になっていることが少なくないように思われる。

（45・1・6）



